

〈追悼文〉

## 恩師橋本勲先生との思い出

高 橋 秀 雄

私の恩師である橋本勲先生が、ご逝去されたことは大変残念なことです。橋本先生は、自由かつ闊達であり型にはまらないような、今ではあまりみられなくなったタイプの学者であり、なおかつ温厚でお人柄もとてもよい方でした。

橋本先生には京都大学大学院経済学研究科の修士課程、博士後期課程の5年間ご指導いただきました。橋本先生をここで追悼申し上げるにさいして、生前の橋本先生の学会での活動や業績等については、他の方が触れられるかもしれませんが、長年ご指導いただいた弟子としての立場から、先生の回想を中心に述べたいと思います。

私が大学院生のときには、橋本先生のもとで、特にマーケティング・チャネルの管理の問題を中心に研究していましたが、先生は研究分野の決定や研究方法等についてあれこれと指図されるようなことはなく、全く自由な形で研究させていただきました。そういう意味では、まさに京都大学の良き伝統であるアカデミック・フリーダムを体現されていた方でした。つまり、指導教授が大学院生の研究分野や研究方法等についてある程度決定したり方向付けしたりして、細かく指導していくという方法もあるわけですが、そうした指導方法は一切とられなかったのです。橋本先生のような指導方法はややもすれば自由放任主義とみなされがちですが、将来自立した研究者を目指そうとする大学院生にとっては最適の指導方法であったといってよいでしょう。ある程度のヒントとなるものは提供していただくものの、基本的には研究テーマは自分で設定し、必要な資料や参考文献等は自分で探し出し、分析視覚や論点も自分で考えていくのです。自分としては、あれこれあまり細かく

指図されたくない気持ちが強かったので、橋本先生の指導方法は私に非常に適していたと思います。

橋本先生に指導教官として修士課程と博士後期課程の5年間一貫してご指導いただいたのは、記憶に間違いがなければ、後にも先にも私1人のみであったのですが、そうしたことから分かりますように、橋本ゼミには大学院生はあまり在籍しておりませんでした。ゼミでは何回も研究報告をさせていただきましたが、こうした状況でしたので、それに加えて近隣の大学に就職されているOBの先生方を適宜お招きして研究報告をしていただくということをも行っていました。1回当たりのゼミの時間は長く、途中で何分かの休憩時間をとるものの、午後1時過ぎから始めて午後5時過ぎまでやりました。議論が長時間に及ぶことが多かったので、かなり疲れてくたくたになることもありました。ゼミでは研究報告に対して自由な意見交換がなされており、そのなかで私は遠慮会釈なしにかなり言いたいことを言っていましたし、橋本先生は遠回しな言い方をされることがよくありましたので、それに反発してストレートにものを言うことをしておりました。そうしたところから、ときどき橋本先生は高橋君には参ったなという顔をされて苦笑されていたのを思い出します。橋本先生はかなり寛容でしたが、それはおそらく先生には学問ができてさえいればそれでよいというお考えがあったからではないのでしょうか。いずれにせよ、教員、学生という立場の相違を超えて、自由に意見を交換することができる場所としてのゼミがあったことは非常に良かったと思います。

橋本先生の学問的立場、研究分野等と、私の学問的立場、研究分野等とはかなり異なりますので、現在奉職している大学の同僚からそうした点を指摘されたことがあります。指導教官によっては、自分の学問的立場、研究分野等をその弟子にも受け継がせようとする人たちがいるかもしれませんが、橋本先生はそうしたところは微塵もなく、とにかくマーケティングや流通等の枠内であれば、どのような方法を用いるか、どのようなことを研究するのか、といったことに関して一切干渉するようなことはありませんでした。今から思えば、当時私みたいな大変生意気な大学院生を辛抱強く面倒みていただいただけでなく、かなり自由に研究をさせていただいた橋本先生と巡り会えた

ことは大変幸運なことであったと思います。

大学院生のときには、橋本先生のご自宅に何回かお招きいただきました。橋本先生も私もクラシック音楽を聴くことが趣味でしたので、ご自宅に窺ったときには先生はよくクラシック音楽の話をされました。橋本先生は、特にドイツやロシア等の作曲家の作品を聴かれておられたようです。今でも記憶に残っているのは、冗談交じりであったのですが、先生が自分が亡くなったときにはグリンカのルスランとリュドミラ序曲を流してほしいといわれたことです。そして2枚同じLPレコードをもっておられたようでしたので、そのうちの1枚をいただいて帰ったのを覚えております。それは現在も手元にあります。先生の形見分けのようなものとなりました。

大学院の5年間の学業を終え、亡くなられたもうひとりの恩師である降旗武彦先生とともに岐阜県の朝日大学の新設学部に着任しましたが、その大学に就職することに対しては橋本先生からかなり反対されました。先生のご自宅に呼び出され話し合いをしましたが、結局私の方が押し切って意志を通してしまいました。このようにわがまま放題をしたのですが、そのことで勘当扱いされるどころか、橋本先生はご自宅に就職祝いをするために私を呼んで下さいました。本当に橋本先生にはよくしていただいたと大変感謝しております。

結局朝日大学には5年間勤めました。その後1990年から、中京大学商学部（中京大学総合政策学部の前身）に着任しました。人の縁とは不思議なもので、その中京大学商学部には京都大学を退官された橋本先生が1989年から既に着任されていました。今度は同じ大学の教員同士という関係で9年間お付き合いさせていただくことになったのです。中京大学商学部時代の橋本先生は、やはり大学院でご指導いただいたときと同様に、あれやこれやと命令したり指図したり、干渉したりするようなことは一切なく、自由に研究教育活動をさせていただきました。先生とは名古屋で、たまに話をしたり食事や酒を飲みに行ったりすることもありましたが、お互いあまり干渉し合うようなことはありませんでした。恩師と同じ大学に着任したのであるから、弟子として色々とお世話をすべきではなかったのかとお考えの方もおられるかもしれません。しかしながら、そもそも橋本先生はそうしたことを望まれる

ような方ではありませんでしたし、もしそのようなことをしたとすれば先生は、高橋君はどうかしてしまったのかと訝しく思われたことでしょう。私としてもお世話することなどよりは、弟子として橋本先生に恥をかかせないようにするために研究業績を上げることの方が重要であると考えていましたので、論文を多数執筆するとともに単著を何冊も出版する、といったことの方に努力を集中しておりました。橋本先生は、私のそうした努力を認めてくださり、大変喜んでおられました。2004年に橋本先生が叙勲されたときの祝賀パーティの挨拶のなかで、先生がそうした私の研究姿勢について触れられるとともに、先生が最も信頼している男がこの私であるとおっしゃって下さったことは、私の一生涯の思い出として残ることでしょう。

私が今こうして一人前の研究者としてあるのは、大学院生のときから温かく見守って下さった橋本先生のおかげです。橋本先生と巡り会え、ご指導いただけたことは大変幸運なことでした。橋本先生がご逝去され残された私達弟子としては、先生の御遺志を継いでより一層研究に精進することを通じ、学者として大成することを目指すのがなよりの先生への供養であると考えます。ご逝去された橋本先生から受けました多大な学恩に対しまして感謝申し上げますとともに、先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。